

第1回日本赤十字看護学会学術集会

会長挨拶

日本赤十字看護学会の発足を迎えて

樋口 康子*

Establishing the Japanese Red Cross Society of
Nursing Science

Yasuko Higuchi



当学術集会の会長といたしましてご挨拶申し上げます。皆様のご尽力により、ここに日本赤十字看護学会の発足を迎え、この上ない喜びで一杯でございます。

日本赤十字の看護教育は、1890年に開始されて以来、わが国における看護教育のパイオニアとして、優秀なリーダーたちを数多く輩出して参りました。現在に至るまで、日本赤十字の看護活動は国際救護や災害救護をはじめ、国内外の保健・医療・福祉の領域において幅広く展開さ

れ、大きな貢献を成しております。

顧みますのに、日本赤十字中央女子短期大学が改組され日本赤十字看護大学を設置するに至りましたのは昭和61年（1986）4月でございました。その後、平成5年（1993）に大学院修士課程が設置され、平成7年（1995）に博士課程を出発させることができました。

当時、短期大学を大学に改組する時も、大学院の修士課程や博士課程を設置する時もそれ程問題なく遂行されたわけではありませんでした。

*日本赤十字看護大学長

そこには組織体制の改変時にはいつもつきまとういくつかの問題が存在しておりました。第1に、従来の安定性をよしとして変革を避けたがる組織そのものもつ傾向、第2に新しく変革するのに必要な施設設備を整える財政基盤の貧しさ、第3に大学教育の資格をもつ教員の不足などがありました。

一方、社会変化の速度は意外に早く足元に及び寄っており、科学技術の急速な発展による高度医療の急速な出現、治療方法の複雑化、人口の少子高齢化、介護者の老齢化、その他等による社会的変動が怒涛のように一気に押し寄せてきております。

その結果、保健・医療・福祉の体制は大きく変わり、看護の社会的責務も必然的に大きく変化してきました。その変化を予知しそれに対応できるよう、人も財源も十分でない状態の中でありながら日本赤十字看護大学は比較的早期に設立を果たしたと思われまます。過去15年間における日本赤十字看護大学の卒業生・修了生は総数700名を超えております。

私共の環境は益々凄まじい速さで変化してゆくことが予想されますが、それを予測し早急に対応するために研究体制を整備する必要があると考えております。

赤十字関連の学会と申しますと、すでに日本赤十字医学会がございませす。看護学は医学と異なる視点のもとに学問的に高い知識と実践力をもち、相互に密接な協力をし合せて、医療の質を益々高めていきたいと思っております。そのためには本日お集まりの皆様とともに、総力をあげて実践科学としての看護学を追究し、また従来の医療のあり方を検証し、新しい看護学のあるべき姿を探って参りたいと考えております。

赤十字の理念の根幹は「人道Humanity」に

あり、それは対象となる人の国籍、民族、宗教、社会的地位などのいかに問わず、また敵味方の区別なく、人間の苦痛と戦い、その人を保護し、援助し、育むために、自らそこへ駆け寄って手をさしのべる態度にあります。そして赤十字の看護専門職は、国内および国際的な場において、この理念を個々の実践の原理として活動すること、そしてその根拠と方法を学術的にまた体系的に追究する使命をもっています。

新しい世紀を迎えるにあたり、日本赤十字看護学会を設立できましたことは大変意義深いことでありますし、これからの赤十字の看護をさらに発展させていくためには、これまでの私たちの歴史と伝統をふりかえり、それらの反省をふまえながら、これからの新しいビジョンを創造しなければならないと身の引き締まる思いでございます。

来るべき21世紀における赤十字の看護には、人間の生命と健康にアプローチする看護学を確立するための研究体制の整備拡充はもとより、社会の変革に応えられる教育と実践のさらなる刷新が求められております。さらに国際的に活躍する看護専門職を育成する中心的教育機関としての役割を果たし、国際的研究ネットワークを拡充させることもますます重要となります。

第1回学術集会では、赤十字の看護実践・教育・研究の各分野がそれぞれの立場を超えて共に考え力をあわせて、新しい理念の構築と実現に向けてその一步を踏み出したいと願っております。

最後に日本赤十字看護学会設立準備のために、発起人としてご賛同下さった先生方、そして会則等の作成やその他広範囲にわたる準備のためにご尽力くださいました方々に心より深く感謝申し上げます。